

Title	魯迅『中国小説史略』における六朝志怪の引用について
Sub Title	A study of the quotation of Liuchao Zhikuai in Lu Xun's "A brief history of Chinese novels"
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.18 (2025.) ,p.59- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20250331-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅『中国小説史略』における六朝志怪の引用について

溝部良恵

はじめに

周知の通り、魯迅『中国小説史略』^①（以下『史略』と略す）は、中国における中国小説史研究の嚆矢であるとともに、今なお、中国小説史研究において大きな影響力を持っている。また『史略』自身が、研究対象となり、『史略』成立の経緯、魯迅の小説観の特徴及び西洋や日本の学問からの影響についての分析など、多方面からの研究が行われてきた。^②

特に『史略』における六朝、唐代に関する記述については、魯迅が『史略』第八篇「唐之伝奇文（上）」冒頭に示した伝奇の源は、六朝志怪である（「伝奇者流，源蓋出於志怪」とする「志怪から伝奇へ」という中国小説史の流れ、また唐代に至りはじめて、虚構を用いた作品が書かれた（「始有意為小説」ということの妥当性をめぐって、議論が行われてきた。

そして近年に至っては、唐代伝奇は、六朝志怪からではなく、雑伝を起源と考える説が熊明氏を中心に提出されている。^③

魯迅は、一九〇九年、日本から帰国した後、『古小説鈎沈』や『会稽郡古書雜集』など、古籍の蒐集をはじめ。『古小説鈎沈』は、六朝志怪について、魯迅が多くの資料に基づき、各書にちらばる話を収集し、小説集ごとにまとめ、綿密な校定を行ったものである。それ以前において、『重校說郛』、『五朝小説』などの類書や叢書の中に六朝の話は集められていたが、その姿勢は、編者が自らの興味にまかせて、六朝の話を集めたという側面が強かった。これは、近代以前における志怪の扱いとしては、一般的なものであり、読者も学術的な正確さを求めることはなかった。しかし魯迅が、『古小説鈎沈』を編んだのは、中国小説史研究の基礎を築くためであり、前野直彬の言葉を借りれば、六朝小説の資料整理は、「魯迅によって初めて緒についた」のであった。^④

陳平原も魯迅の小説史研究を高く評価し、とりわけ『古小説鈎沈』をはじめとしたテキストの収集が魯迅の小説史研究の大きな基礎となっていたことを指摘している。^⑤その成果は、『史略』に志怪の本文を引用するという形で取り込まれており、むしろ時に、『史略』は、論断よりも引用が多いと指摘されることもあった。魯迅自身、胡適に宛てた手紙の中で、『史略』に論断が少ないこと、そしてそれが『史略』の欠点であることを認めている。^⑥しかし、膨大な海のような多量の書の中に、まさに糸を垂らし、鈎針で釣るように、掬い上げまとめあげた『古小説鈎沈』の中から、『史略』に引用するにあたってどの話を選んだのかということは、魯迅がいかに中国小説史を構築しようとしたのか、ということと密接に関わっているものと思われる。

そこで本稿では以上のようなことを踏まえながら、『史略』の性質を考える一つの試みとして、『史略』における「引用」、とくに第五篇「六朝之鬼神志怪書（上）」及び第六篇「六朝之鬼神志怪書（下）」における志怪の引用に注

目してみたいと思う。

一・中国小説史研究の始まり

まず魯迅の引用を考察するにあたっての論点を整理しておきたいと思う。

『史略』冒頭「序言」において、魯迅は「中国の小説には従来歴史がなかった。あったとしても、外国人が書いた中国文学史にあったか、あるいは後に中国人の著作の中でも書かれるようになったが、その記述の量は全体の十分の一にも及ばなかったので、内容は詳しくなかった」と記している。^⑦とりわけ日本においては、中国に先んじて、中国小説史が記されたことが知られているが、筆者は以前、小説史研究の先駆者としての森槐南に注目した論考^⑧や明治期の文学史における小説の記述について注目した論考を発表した。^⑨その際に、筆者は、宋代以前の小説史の記述に着目した。その理由として、宋代以降の白話小説や戯曲に関しては、金聖嘆や李漁による批評を踏まえた記述が多く見られるのに対し、宋以前については、『漢書』「芸文志」や『四庫全書総目提要』「子部小説家類」の記述に拠り、両書にあげられた書名を記しただけでも多く、中国小説史を構築する上で、宋代以前をどのように記述するかという問題が重要であることを指摘した。そして調査の結果、明治期の小説史研究における宋代以前の記述に関し、多くの書に共通する以下の特徴が確認できた。

一・中国においては、宋元以前において、小説が発達しなかったことを指摘し、理由として、儒教の影響により、特に北方において、実際の規範、道徳を重んじる文化が優勢を占めていたことをあげる。

二・『漢書』「芸文志」「小説家」、『四庫全書』「小説家」提要に記載された「小説家」の起源、書名を引用するこ

とが多い。

一については、明治期においては、文学史の記述は、フランスのイポリット・テーヌの『英国文学史』で示された、「時代、環境、種族が、各国の文学の在り方を決める」という理論に大きな影響を受けていたことが考えられる。一方、二については、明治初期の文学史の中では、宋代以前の記述は、『四庫全書総目提要』の記述に拠っていることが多く、中国小説の起源をどのように記載するか、ということについて、初期の中国文学史、小説史の記述の中では、確立されていなかったことがうかがわれる。

そのような中で、森槐南は、明治の初期において、小説を経書や史書の補遺ではなく、芸術として独立した一ジャンルとしてとらえ、早稲田大学の前身である東京専門学校文学科や東京帝国大学において、中国小説史を講義し、『早稲田文学』『支那小説の話』において、その考えを示した¹⁰⁾。また不慮の死後、弟子たちによりまとめられた『作詩法講話』¹¹⁾においては、「第六章小説概要」の一章があり、詩作のインスピレーションを得るために、「小説」を「無上の宝庫である」ととらえていたことが記述されている。

そして、これらに大きな影響を受けて書かれたのが、大正八年（一九一九）に出版された、塩谷温の『支那文学概論講話』である。¹²⁾本書は、従来の文学史と比較して、小説、戯曲に多くのページを割いており、後にこの小説について書かれた部分は、中国でも翻訳されたが、陳源は『史略』が塩谷の本を剽窃したという中傷を行った。それに対し、魯迅は、『語絲』紙上で発表した反論の文章「不是信」¹³⁾において、塩谷温の『支那文学概論講話』が『史略』執筆の参考書の一つであったことを認めたうえで、特に、『史略』第二篇に関しては、『支那文学概論講話』に拠ったと述べている。しかし六朝小説について、塩谷温が『漢魏叢書』のテキストを用いているのに対し、魯迅自身は、自分で編纂したテキスト（『古小説鈎沈』を指す）を用いていること、唐代小説に関しても、塩谷温が唐代

小説の分類に関し、森槐南の分類に拠っているのに対し、魯迅自身は自ら分類したことなどを反論している。¹⁴ この『史略』第二篇とは、「神話与小説」として、中国小説の起源としての神話に触れたものである。

前稿においても触れたが、塩谷温は、『支那文学概論講話』を著す際に、森槐南の講義や書物から大きな影響を受けていた。そのことについては、「支那文学概論講話」は、構成において森槐南の『作詩法講話』と共通したところがあり、これを骨子としたと一般にみなされているようだ¹⁵」との指摘もある。しかし、同著第六章「小説」、第一節「神話伝説」においては、その冒頭において、

いずれの国民といえども太古草昧の世にあつて、神話・伝説を有していないものはありません。インド然り、ギリシア然り、もちろん中国にも神話・伝説が多くあつたのであります。

と述べている。塩谷は、東京帝国大学を卒業後、明治三十九（一九〇六）年に、東京帝国大学講師、助教授となり、その後、ドイツに二年半、清国に三年半留学した。『支那文学概論講話』において中国小説史を記述するにあたって、神話伝説からはじめたことの背景には、こうした塩谷の欧州の学問を学んだ影響が大きく関係しているものと思われる。ドイツ留学を通じ、欧州の学問を学んだ塩谷は、新しい学問の構築を目指し、中国小説の起源として、神話伝説を取り上げること、中国の文学の中に、西洋と匹敵するものを見出そうとした。つまり塩谷にとって、中国文学は、西洋におけるギリシア語、ラテン語の古典に匹敵するものと認識されていたと考えられる。

以上の経緯を見ると、一九世紀末から二十世紀初頭にかけて、中国小説史の執筆は、現在のように個人の研究の集大成として学説をまとめたものというよりも、西欧の文学史、小説史を範としながら、試行錯誤の上、構想され

ていったものであり、時には既出の書を参考に書かれていたものであることがわかる。『史略』の一部にもそのような側面があり、それは裏を返せば、魯迅にとっても小説の始まりをどのように記すのか、ということは、考慮すべき大きな問題であったことがうかがわれる。例えば、現在の『史略』冒頭第一篇にあたる「史家の小説についての著録及び論述（史家對於小説之著録及論述）」は、『史略』の前身となった大学における講義録の一つ『小説史大略』においては存在するが、もう一つの現存する講義録『中国小説史大略』⁽¹⁶⁾の中では削られている。そして、一九二三年に出版された『史略』において、この篇は復活していることなどからもそのことがうかがわれる。

これらを踏まえて、『史略』第五篇「六朝之鬼神志怪書（上）」及び第六篇「六朝之鬼神志怪書（下）」の内容を検討してみると、魯迅が『古小説鈎沈』の蒐集を通じて培った六朝志怪への理解に基づいており、それ以前の中国小説史とは一線を画するものであることがわかる。以下、具体的に『史略』の引用について検討することでその特徴を確認してみたい。

二 『史略』における志怪の引用

『史略』第五篇「六朝之鬼神志怪書（上）」及び第六篇「六朝之鬼神志怪書（下）」においては、合計二十六話の引用がある。具体的な書名と話数は以下の通りである。

『列異伝』三話／『博物志』四話／『搜神記』三話／『続搜神記』二話／『異苑』四話
『続齊諧記』二話／『冥祥記』三話／『神異記』二話／『拾遺記』三話

すでに指摘した通り、六朝志怪のテキストは、多くの書が散逸しており、完全な原書はほぼ存在しないこと、類書や叢書に断片的に収められており、その際の重複も多いことから、各小説集固有の性質を捉えることは難しい。『史略』の主眼もそこにはないと思われる。そこで、以下、小説集にとらわれず、『史略』に引用された二十六話の内容の傾向を見てみたい。

(一) 物語性のある話

第五篇「六朝之鬼神志怪書(上)」の初めに『列異伝』のものとして引用されている話は、「旅の途中に鬼と出会った宋定伯が、自らも鬼と偽り、一緒に旅をし、何度か、鬼に人間であることを悟られそうになるが、うまくかわし、鬼の嫌うものが、人間の唾であることを聞き出す。目的地に着いたところで、宋定伯は、鬼をおさえつけ、唾をふきかけ、鬼を売り渡し、お金を儲ける」という話である。宋定伯と鬼のユーモラスなやりとりが描かれ、「宋定伯捉鬼」、「宋定伯売鬼」として六朝志怪を代表する話としてよくあげられる話である。『史略』では以下の通り引用されている。

南陽の宋定伯は、若い頃、夜道で幽霊にあった。「お前は誰だ」と尋ねると、「幽霊だ」と答えた。幽霊も「お前は誰だ」と尋ねてくる。定伯は、幽霊をだましてやろうと「俺も幽霊だ」と答えた。幽霊は「どこに行くのか」と聞いてくるので、「宛の町まで行くところだ」と答えると、幽霊も「俺も宛の町まで行こうとしている

んだ」と言う。そこで、数里ほど一緒に行くと、幽霊は「歩いて行くのはたいへんだから、お互いにおぶって行くのはどうだろう」と言い出したので、定伯も「大いに結構」と答えた。そこでまず幽霊が定伯を背負って一里ほど歩いたが、「あんたは重すぎるよ。幽霊じゃないんじゃないか」と言う。定伯は、「俺は幽霊になりたてだから重いのだ」と答えた。今度は定伯が、幽霊をおぶると、ほとんど重さを感じなかった。このようなことを二度も三度も繰り返すうちに、定伯は、「俺は死んだばかりだから、幽霊が何を嫌うか知らないんだが」と尋ねた。幽霊は「人間の睡だけが苦手なんだ」と答えた。……もう少しで宛の町に着くというところで、定伯は幽霊を肩に担ぐと、きつく押さえた。幽霊は大声できいきいとわめき、下ろしてくれと頼んだが、定伯は耳を貸さずに、どんどん宛の町の中に入って行き、地面に下ろすと幽霊は一頭の羊になった。そこでこれを売り飛ばした。あとでまた化けると困るので、唾をつけ、千五百貫のお金をもうけた。¹⁷

さらに長文の引用で紹介されている話に、「陽羨鵝籠」（『続齊諧記』）の話がある。あらすじは、「陽羨の許彦が旅の途中で、一人の書生に出くわすと、足が痛いので、許彦の背負う籠に入れてくれと言う。冗談だと思ったが、書生は、すんなり籠に入り、重くもならなかった。先へ進み、樹の下で休んだ時に、書生がお礼に一席設けたいと言ひ出し、口の中からいろいろな料理の入った箱を取り出す。さらには、口の中から婦人を吐き出す。少しすると書生は酒を飲んで寝てしまうが、婦人は書生に不満があり、男を連れていい、口の中から男を吐き出す。さらに男も女を連れていい、口の中から若い女を吐き出した。書生が起きそうになると、若い男が若い女を飲み込み、その男をまた最初の女が飲み込み、起きてきた書生が女と器や皿を口に入れて、許彦に礼を言つて帰っていく」という話である。魯迅が引用した一部を見てみる。¹⁸

酒が進むと、書生が許彦に言った。「先ほどから、婦人を一人連れております。今から迎え入れたいと思いますが。」彦が「わかりました」と言うと、口の中から女を一人吐き出した。年のころは、十五、六で、綺麗な服を着て、容貌も美しい。ともに宴席に坐した。にわかには書生が酔って寝てしまうと、女は彦に「書生の妻になつてはおりますが、心に恨みをいだいております。さきほどから男を一人連れてきております。書生が寝たので、この人を呼びたいと思います。書生にはどうかお話になりませんように」と言った。彦は「わかりました」と言った。女は、口の中から、年のころ二十三、四歳、また利発そうな様子の男を吐き出した。男は彦とあいさつを交わした。書生が起きかかったので、女は口の中から錦の帳を吐いて書生を遮った。書生は女を引き留め、ともに寝た。若い男は、「この女に情はあるのですが、心が定まりません。先ほどから密かに女を一人連れてきています。今からこの女に会おうと思いますが、口外しないでいただきたい。」彦は「わかりました」と言うと、若い男は年のころ、二十あまりの女を口から吐き出し、一緒にお酒を飲んで、長いことふざけ合っていたが、書生が動く音がしたので、男は「二人はもう目を覚ましたんだな」と言った。そして吐き出した女を口の中に戻した。しばらくすると書生のところにいた女が出てきて、彦に「書生が起きそうですわ」と言い、若い男を飲み込み、一人で彦に対座していた。それから書生が起きてきて、彦に向かって「ひと眠りのつもりがつい長くなってしまいましたがお一人にしてしまって、つまらなかったでしょう。日も暮れてきましたので、そろそろお別れしたいと存じます」と言い、女を飲み込み、二尺ばかりの銅の皿を除いて、器や皿も残らず口に入れ、彦に別れを告げ、「何も差し上げるものがありませんので、これを記念にしてください」と言った。

許彦の前で、男が口から、女を吐き出し、次に女は若い男を、さらに若い男も若い女を吐き出す。四人の男女は、自分の相手への不平や不実な気持ちを述べるが、逆の順序で呑み込まれ、最後には何事もなかったかのように、男の口にすべて収まる。奇想天外な話のおもしろさとともに、一人ですべてを見る許彦を通して、四人の男女の同床異夢の様が浮かび上がる。

『史略』においては、この話は、段成式が『酉陽雜俎』において、インドの仏典に由来する話であること、また『統齊諧記』の作者呉均が、この話の発想の奇怪さに着目したのだろうと指摘していることに触れ、さらにこの話が後に、中国化した話として、晋の『靈魂志』の中に収められた類話を紹介している。不思議な物語が、仏教の伝来や文化の交流によってインドからもたらされ、さらには中国化された新しい話になっていくことが捉えられている。

その他にも、「焦湖廟に置かれた玉の枕の裂け目から枕の中に入った楊林がこれまでの自分とは別の富貴な人生を経験するが、突如として夢から覚めると、元の枕の傍らにいた」という唐代の沈既濟「枕中記」の本事とも言われる話が引用されている。これらの話が唐代により物語性の強い伝奇を生み出すものとなったという『史略』の説を裏付ける話でもある。いずれの話も後の時代の話に比べれば、複雑な起伏に富む物語ではないが、素朴で、明るいユーモラスな話は、六朝志怪ならではの話とも言え、六朝志怪の性質の一面面を示している。これらの話は現在でも六朝志怪を代表する話とされているが、怪異を断片的に記したものが多い志怪の中から、こうした話を選んだのは、魯迅が、六朝志怪の中にある虚構の萌芽に着目していたこととまたこうした話を選ぶ確かな眼を持っていたことを示している。

(二) 怪異を記した話

その他の多くの話は、怪異を記したものであるが、その中にも地獄めぐり、再生譚として知られる趙泰の話など物語性のある話がある一方で、怪異の内容に主眼を置いた話も多く引用されている。以下に簡単なあらすじを記す。

『搜神記』

無鬼論を主張する阮瞻のもとに來客があり、様々な議論をした。鬼神のことに話が及ぶと客は、阮に言い負かされたが、最後に、自分こそは鬼なのだ、と言い帰っていく。

『続搜神記』

『搜神記』の作者、干宝の父が亡くなった際、父が気に入っていた妾も生きのまま埋葬されたが、母が亡くなった際に、墓を開けると、妾は生きており、墓の中の生活を語った。その後、干宝の兄も病氣になり、氣を失ったまま数日過ごしたが、意識が戻り、その間の話をした。

『異苑』

東海の徐氏の婢が突然病にかかり、異常なほど掃除をするようになる。よく観察していると、箒が壁の中から出てきて婢のベッドに行くのが見えた。そこで箒を焼くと、婢は正常に戻った。

『異苑』

東莞の劉邕は、かさぶたを好んで食べる性癖があった。あるとき、友人のところへ行き、かさぶたが落ちているのを見て、それを食べた。友人は驚いたが、自身のかさぶたを劉邕にすべて渡して食べさせた。南康国には、下級の役人が二百人ばかりいたが、劉邕は、罪の有無にかかわらず、彼らを鞭で打ち、傷跡にできたかさぶたを毎日食べた。

『史略』では、六朝志怪を伝奇の源ととらえていたが、六朝志怪は必ずしも、(一)で分類したような宋定伯や陽羨の許彦の話のような物語的な展開を持つている話ばかりでなく、むしろ数的には、上記のような不思議な怪異の話が圧倒的に多い。これらの話は、一見すると、簡単な記述で、物語的な話の前段階の単なる怪異を記録したものに感じられるかもしれない。しかし、箒に取りつかれたと思われる女性の話、かさぶたを食べ続ける男性の話は、いずれも理由も記されず、淡々とした記載が逆に我々が普段読み慣れている話と異なるものであることを感じさせる。戸倉英美は、こうした志怪の記述は、「志怪は伝奇の前段階、技術的に未熟なためにごく簡単な記述にとどまっているものと位置づけられるようになった」が、志怪は伝奇と異なり、「事実の記録」であり、「志怪の特徴は、何ら物語的なふくらみのない簡潔な記述にある」と言われるが、「だがむしろ重要なのは、短い中に、時折妙に詳細に記述される部分があることではないか」と指摘する。¹⁹⁾ そもそも六朝志怪は、『隋書』『経籍志』や『旧唐書』『芸文志』においては、史部に分類され、史書の一部ととらえられてきた。特に、六朝においては、実証的な史学が発達したことで、身の回りに起こる怪異の現象に対し、知り得た限りのデータを書き連ねたのが六朝志怪であり、

「志怪の筆者は奇妙な話で人を驚かそうとするのでは」なく、「ひたすらより正確に、より明晰に記録」することで、六朝志怪は他の時代、ジャンルとは異なる不思議な記述となったと戸倉氏は指摘する。²⁰⁾

小南一郎も、六朝志怪に書かれたモチーフは清代まで引き継がれていくが、六朝の人々は怪異に対して一定の距離を保ち、趣味的に相対していると言う。それに対して、六朝の志怪には、そうした人々の余裕のある態度を発見することは困難であり、怪異に対し切羽詰まった、のつぴきならない態度で相対していると指摘する。²¹⁾確かに魯迅が引用した話は、戸倉氏や小南氏が指摘するような、他の時代の話とは異なる不思議な印象を残す話であり、『古小説鈎沈』で蒐集した多くの話の中から、魯迅がこれらの話を選んだのは、六朝志怪の性質の一端がこれらの話に表れていると考えたからと思われる。

魯迅は『史略』で引用した話について、基本的には、具体的な評価を述べてはいないが、張華の『博物志』に触れた際には、『博物志』は後世の偽作である可能性が高いこと、異境や奇物、雑事を分類したもののだが、古書から集めたもので、全く新鮮味にかける、と述べ、²²⁾以下のような西域の珍物「火浣布」について記した記事やスッポンについての記事などを引用している。

『博物志』

『周書』に曰く、「西域から火浣布を献じ、昆吾氏は切玉刀を献じてきた。火浣布は汚れても火で焼くときれいになり、刀は、蠟を切るように玉を切る。」火浣布は、漢の時代に、献じてきたものがいたが、刀についてはいまだ聞いたことがない。²³⁾

このことから魯迅は、このような『博物志』の話に関して、『続搜神記』や『異苑』の話との違いを感じていないと考えられるのではないだろうか。

(三) 民間・民衆へのまなざし

上記のことをさらに考える手がかりとして、『古小説鈎沈』「序」の文章を見てみたい。

民間に流布したつまらぬ書は、大事を成すためには妨げとなる恐れがあるとされてきたが、後に優れた作品が生み出されたのは、それがもとなっていたのである。まして、街角で採録したものには、国の民の純真な心が表れており、創作されたものは、読書人が一心に専念した結果できたものだ。⁽²⁴⁾

魯迅は、小説は、従来の伝統文化の中では、取るに足りないものとされてきたが、それは、人々の純真な心から出たものである、ととらえている。そして、それは従来考えられていたような、取るに足らないものであっても、為政者にとって見聞を広めるという意味で、価値を見出されてきた小説に、普通の人々の真の姿を描き出すものとして、積極的な意味を見出そうとすることであった。

『史略』における志怪の引用をこのような観点で見ると、これまで見てきた話の多くに登場するのは、普通の人々であり、そこには正統の詩文には描かれることのなかった六朝の人々の生きる世界が垣間見られる話書かかれていることに気づく。例えばその例として、『列異伝』の話として引用された話に、以下のような話がある。

『列異伝』(一)

神仙の麻姑が、東陽の蔡經の家に降臨した。その手の爪は、四寸の長さであった。經はそれを見て、「実にいい手をしている。あの手で背中を搔いてもらいたいものだ」と心の中で思った。麻姑は大いに怒り出し、經は突然ばたりと倒れた。両目からは、血が流れていた。⁽²⁵⁾

『列異伝』(二)

武昌の新県の北山の上に、望夫石という、人が立っている形をした石がある。言い伝えによると、昔一人の貞婦が、夫が辺境を守るために遠く国難に赴くにあたり、子供を連れて、この山まで見送ったが、ずつと立ち尽くし夫の行く先を望み、化して石になったという。⁽²⁶⁾

これらの話は、一見すると、先の『博物志』の火浣布の話と同じような簡単な話に見えるかもしれない。しかし、麻姑のユーモラスな話は、人々が余暇に集まり、怪異や神仙、笑い話など様々な話をする中で、ふと誰かの思い付きから出てきた話のようなものではないだろうか。あるいは、望夫石は、単なる奇岩の記録ではなく、戦地に向かう夫を石になるまで、見送った妻の想い、またそれに共感する無数の名もなき人々の想いが結晶化され、伝えられた話なのではないだろうか。これらは短い記述であるが、人々が日々の暮らしの中で起こった珍しい出来事や不思議な出来事を伝え合う中で、やがて、「宋定伯」のような話が生み出される物語の萌芽を含んでいるように思われる。知識人が書き記した神仙や怪異の記録に、日々の暮らしの中で育まれた想像力が自然に加えられ、人々を惹きつける話が生み出されていったのではないだろうか。

関詩珮氏は、魯迅が『史略』を構想した二つの基本的な概念は、第一に独創であり、第二は虚構であると指摘している。⁽²⁷⁾六朝の普通の人々が、出会った怪異に真剣に向き合い、事実として書き尽くす、このことによって、生まれた六朝志怪は、『史略』に引用された話がその一端を示すように、他の時代、ジャンルには見られない内容を持つ書となった。⁽²⁸⁾魯迅が、六朝を代表する小説として、まず志怪をあげたのは、まさに志怪に六朝の人々の独創と後に虚構の物語につながる要素を感じたからではないだろうか。

おわりに

陳平原は、魯迅の文学史研究の特色として、『古小説鈎沈』をはじめとする蒐集、校訂を基礎としていること、しかし、考証に拘泥することなく、文学者としての感覚を持つて、作品を読み、評価しており、そのバランスが『史略』をはじめとする魯迅の小説史研究、文学史研究を唯一無二のものとしていると指摘している。⁽²⁹⁾

『史略』における引用の多さは、魯迅自身が言うような欠点ではなく、むしろ各時代の小説の引用そのものに、魯迅の考えが示されており、またその的確な引用を通して、読者は中国小説の豊かな世界に誘われていくと考えることができるのではないだろうか。

以上の成果を踏まえ、六朝志怪以外の引用についても分析を進めることを今後の課題としたい。

注

(1) 『中国小説史略』は、北京大学における講義録をもととし、増補、修訂を幾度か経ている。その経緯については、陳

平原・鮑国華編注『中国小説史略』校注「校注説明」（浙江人民出版社、二〇二四年）に詳しい。本稿では、『鲁迅全集』第九卷（人民文学出版社、一九八一年）所収のテキストを用いる。また本稿では、書名、引用文などは、基本的に常用漢字を用いる。

- (2) 『史略』についての研究史については、温慶新『鲁迅《中国小説史略》研究——以中国小説史学成視野』（九州出版社、二〇一七年）に詳しい。
- (3) 熊明『雜伝与小説 漢魏六朝雜伝研究』（遼海出版社、二〇一七年）など。
- (4) 前野直彬「鲁迅『古小説鈎沈』の問題点」（『中国小説史考』所収、秋山書店、一九七五年）
- (5) 陳平原「作為文学史家的鲁迅」（『学人』第四輯、一九九三年）及び陳平原・鮑国華編注『中国小説史略』校注「導言」（浙江人民出版社、二〇二四年）
- (6) 鲁迅「到胡適（一九三三年十二月二十八日）」（『鲁迅書信』一、人民文学出版社、二〇〇六年所収）
- (7) 『史略』「序言」「中国之小説自来無史；有之，則先見於外国人所作之中国文学史中，而後中国人所作者中亦有之，然其量皆不及全書之什一，故於小説仍不詳。」
- (8) 溝部良恵「森槐南の中国小説史研究について——唐代以前を中心に」（『慶応義塾大学日吉紀要 中国研究』第一号、二〇〇八年所収）
- (9) 溝部良恵「明治期の日本における中国小説史研究について——文学史における記述を中心に」（『慶応義塾大学日吉紀要 中国研究』第十号、二〇一七年所収）
- (10) 「支那小説の話（一）」（六）（『早稲田文学』第五、十、十二、十四、十八、二十号所収）
- (11) 文会堂、一九一一年
- (12) 『支那文学概論講話』（大日本雄弁会、一九一九年）は、表記を現代版仮名遣いに改め、『中国文学概論』（講談社学術文庫、一九八三年）として出版されている。本稿での引用は講談社学芸文庫版に拠った。
- (13) 第六十五期、一九二六年二月八日（全国報刊索引、<https://www.cnbkssy.com/kraslib/keio.ac.jp/v2/browser/JournalBrowsing?bc=&source=GENERALSEARCH&pid=37d135fc5cc34fd22d321db0b58dce&activeId=6728b3ba9864a50f>

b7e5b387&eid=93b37fe6b9902946b8c2b26c56b9c7631' 最終閲覧日二〇二四年十一月四日)

- (14) 「不是信」(前掲注12)「塩谷氏の書、確是我的参考書之一、我的小説史略二十八篇的第二篇、是根拠他的——(中略)——」唐代小説的分類他拠森槐南、我却用我法。六朝小説他拠漢魏叢書、我拠別本及自己的輯本」

- (15) 小野忍「塩谷先生の学問の西洋的方法」(『支那学報』九号所収)

- (16) 『史略』の版本については、前掲注1のほか、中島長文「悲涼の書——『中国小説史略』」(中島長文訳注『中国小説史略2』「解説」、平凡社、東洋文庫六一九、一九九七年所収)に詳しい。

- (17) 南陽宗定伯年少時、夜行逢鬼、問曰、誰?鬼曰、鬼也。鬼曰、卿復誰?定伯欺之、言我亦鬼也。鬼問欲至何所、答曰欲至宛市、鬼言我亦欲至宛市。共行數里、鬼言步行大亟、可共迭相担也。定伯曰大善。鬼便先担定伯數里、鬼言卿太重、將非鬼也?定伯言、我新死、故重耳。定伯因復担鬼、鬼略無重。如是再三。定伯復言、我新死、不知鬼悉何所畏忌?鬼曰、唯不喜人唾。……行欲至宛市、定伯便担鬼至頭上、急持之。鬼大呼、声咋咋索下。不復聽之、径到宛市中、著地化為一羊。便壳之。恐其便化、乃唾之、得錢千五百。(『史略』第五篇)

- (18) 酒數行、謂彦曰、向將一婦人自隨。今欲暫邀之。彦曰、善。又於口中吐一女子、年可十五六、衣服綺麗、容貌殊絕、共座宴。俄而書生醉臥、此女謂彦曰、雖與書生結妻、而實懷怨、向亦窃得一男子同行、書生既眠、暫喚之、君幸勿言。彦曰、善。女子於口中吐出一男子、年可二十三、亦穎悟可愛、乃與彦叙寒溫。書生臥欲覺、女子口吐一錦行障遮書生、書生乃留女子共臥。男子謂彦曰、此女雖有情、心亦不尽、向復窃得一女人同行、今欲暫見之、願君勿泄。彦曰、善。男子又於口中吐一婦人、年可二十許、共酌、劇談甚久、聞書生動声、男子曰、二人眠已覺。因取所吐女人、還納口中。須臾、書生処女乃出謂彦曰、書生欲起。乃吞向男子、独对彦坐。然後書生起謂彦曰、暫眠遂久、君独坐、当悵悵耶?日又晚、当与君別。遂吞其時女子、諸器皿悉納口中、留大銅盤可二尺広、与彦別曰、無以藉君、与君相憶也。

- (19) 「志怪小説とは何か」(月刊『しにか』一九九七年三月号所収)

- (20) 「志怪小説とは何か」(前掲注19参照)

- (21) 小南一郎「顔之推「冤魂志」をめぐって」(『東方学』第六十五輯、一九八三年所収)

- (22) 其書今存、乃類記異境奇物及古代瑣聞雜事、皆刺取故書、殊乏新異、不能副其名、或由後人綴輯復成、非其原本歟？（『史略』第五篇）
- (23) 《周書》曰、西域獻火浣布、昆吾氏獻切玉刀、火浣布汚則燒之則潔、刀切玉如蠟。布漢世有獻者、刀則未聞。（『史略』第五篇）
- (24) 人間小書、致遠恐泥、而洪筆晚起、此其權輿。況乃錄自里巷、為國人所白心；出於造作、則思士之結想。（魯迅輯錄古籍叢編）第一卷、人民文學出版社、一九九九年）
- (25) 神仙麻姑降東陽蔡經家、手爪長四寸。經意曰、此女子実佳手、願得以搔背。麻姑大怒。忽見經頓地、兩目流血。（『史略』第五篇）
- (26) 武昌新原北山上有望夫石、狀若人立者。相伝云、昔有貞婦、其夫從役、遠赴國難、婦携幼子、餞送此山、立望而形化為石。（『史略』第五篇）
- (27) 関詩珮「唐、始有意為小説」——從魯迅的『中国小説史略』看現代小説（fiction）觀念」（『魯迅研究月刊』二〇〇七年第四期所収）
- (28) 戸倉は、「志怪小説とは何か」（前掲注16）において、「信実」か否かを判定する合理的精神と、身の回りのあらゆる物事に、未知の力の存在を感じる精神と、この二つが一人の人間の中に共存したときに、志怪という世にもまれな著述は生まれた」と述べている。
- (29) 陳平原は、『中国小説史略』校注「導言」（前掲注5）において、「魯迅の小説史研究之所以能夠深入、得益於其豐富的小説創作經驗。以一位小説大家的芸術眼光、來閱讀、品味、評價以往時代的小説、自然會有許多精到之處。或許是魯迅的古小説鈞沈太出色了、人們往往忘了其独到的批評而專注於其考掘實績。其实史料の甄別与積累必然後來居上、魯迅『中国小説史略』之難以逾越、在其史識及其芸術感覺」あるいは「像魯迅這樣、文、兼備的學者、無疑是文学史研究的最佳人選」と述べている。